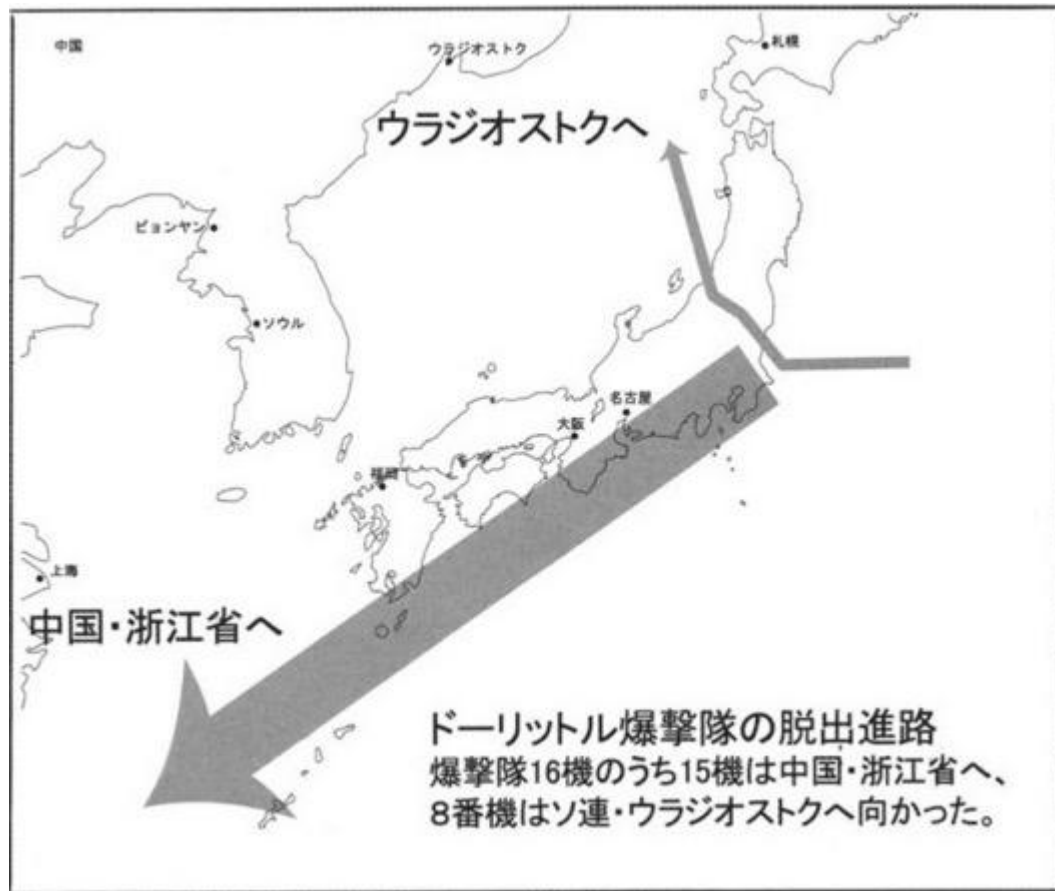
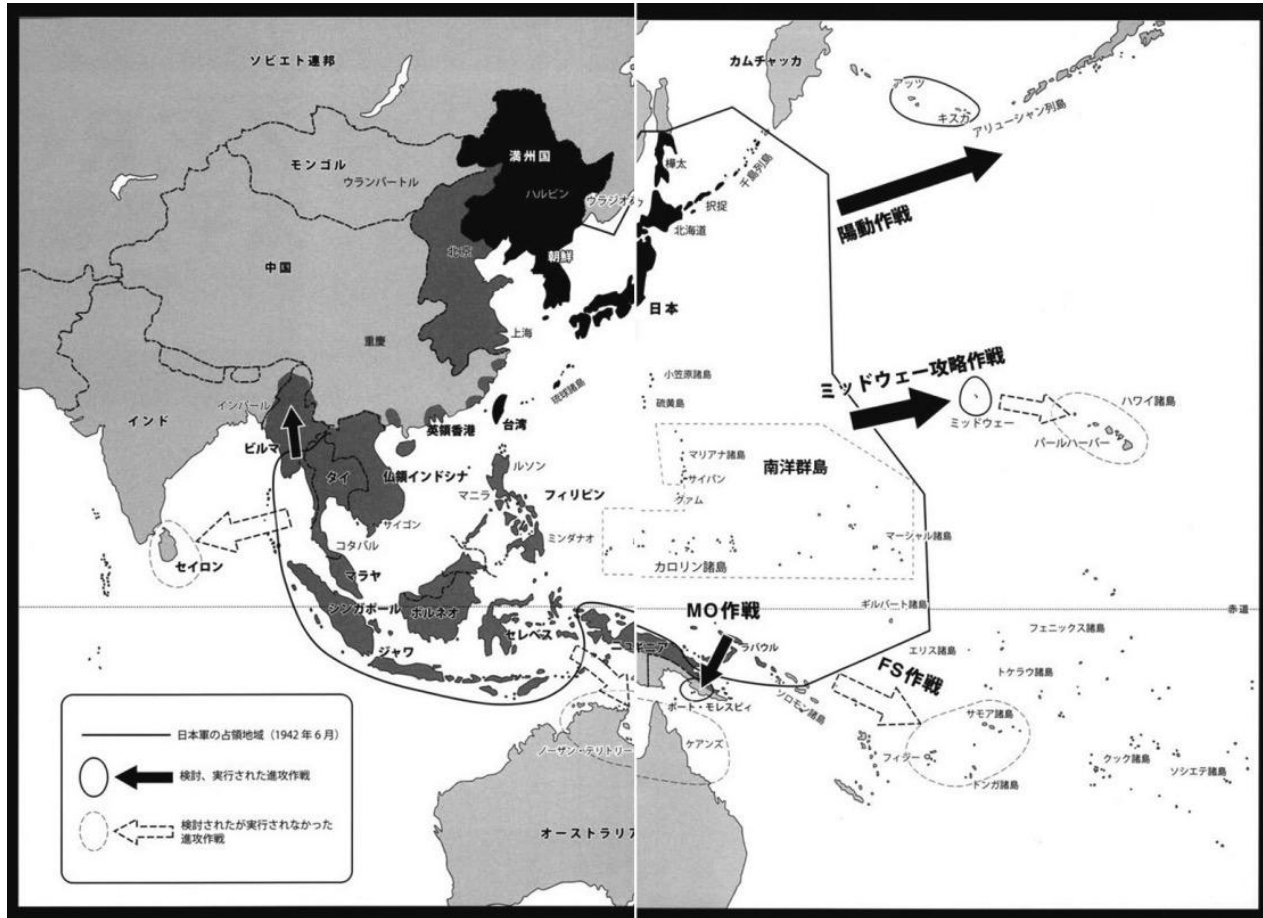


# ドーリットル空襲 Doolittle Raid







# ミッドウェイ海戦

日本

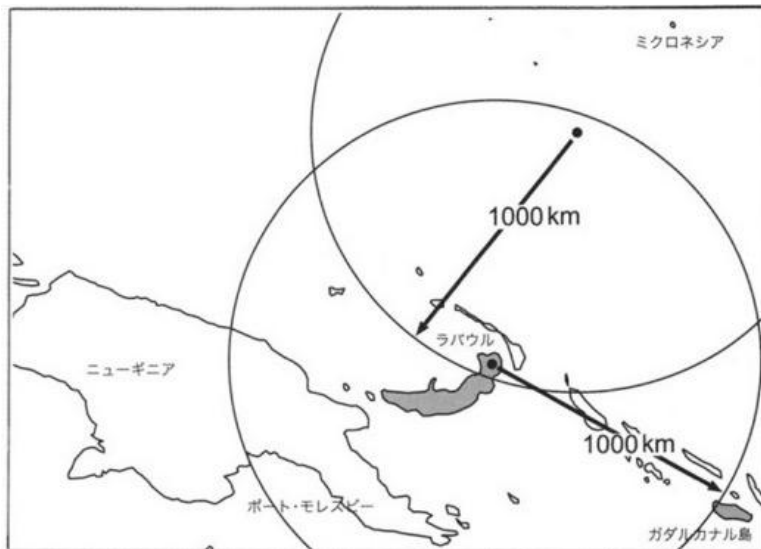
沈没 航空母艦赤城、加賀、蒼龍、飛龍

アメリカ

沈没 航空母艦ヨークタウン

日本側は空母4隻の喪失と熟練の搭乗員の喪失が今後の戦局へ響く

# ガダルカナル作戦



# ガダルカナルの戦い

日本軍が設営した飛行場(ヘンダーソン飛行場)を巡る攻防

日本軍の結果

一木支隊、川口支隊の壊滅

指揮官 一木清直

盧溝橋事件当時、牟田口廉也連隊長の指揮下で中国軍陣地への発砲命令を受けた際に

「本当に発砲しろという命令ですね」と確認の記録を残している。

ガダルカナル島こと飢島

将兵の多くが餓死

戦時徴発された民間輸送船を多数喪失



# 大東亜共栄圏 Greater East Asia Co-Prosperity Sphere

先立つ1931年9月の満洲事変当時には「日満一体」、1938年11月に第1次近衛内閣が日中戦争の長期化を受けて「東亜新秩序」の建設を声明しており、この時には日本・満洲・中国に限定された構想にすぎなかったが、南進論が強まる中で「日・満・華」に東南アジアやインド、オセアニアまでの大東亜共栄圏構想が生まれた。

大東亜共栄圏は、「日本を盟主とする東アジアの広域ブロック化の構想とそれに含まれる地域」を指す。第2次近衛文磨内閣の発足時の「基本国策要綱」(1940年7月26日)に「大東亜新秩序」の建設として掲げられ、国内の「新体制」確立と並ぶ基本方針とされた。これはドイツ国の「生存圏(Lebensraum)」理論の影響を受けており、「共栄圏」の用語は外相松岡洋右に由来する。

生存圏(Lebensraum)

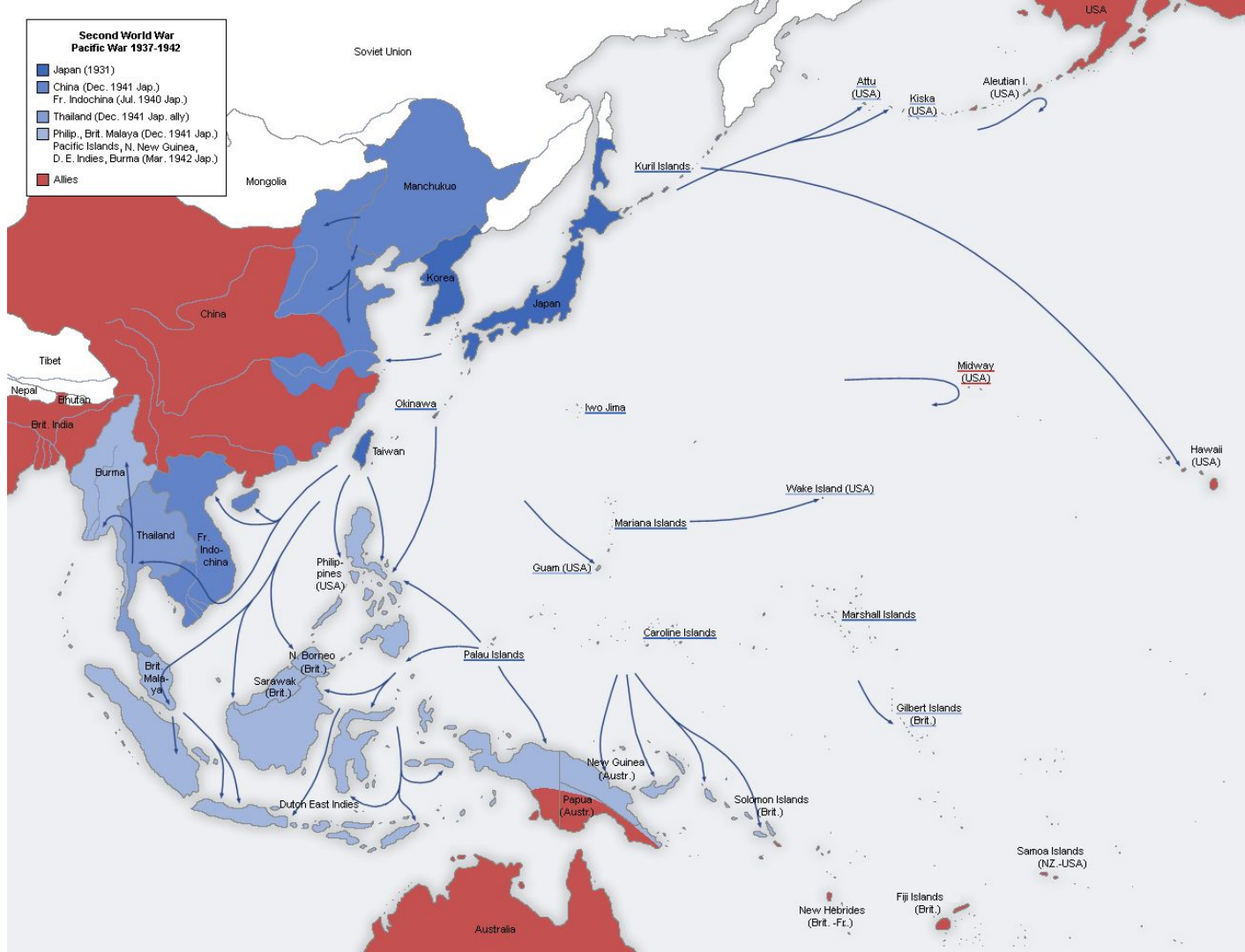
ナチ党はその25カ条綱領で「我々は、我が民族を扶養し、過剰人口を移住させるための土地を要求する。」としているが、その求める土地がどこであるかは明言していなかった。ヒトラーは1925年の著書『我が闘争』の中で初めて東方に生存圏を獲得する。





**Second World War  
Pacific War 1937-1942**

- Japan (1931)
- China (Dec. 1941 Jap.)  
Fr. Indochina (Jul. 1940 Jap.)
- Thailand (Dec. 1941 Jap. ally)
- Philip., Brit. Malaya (Dec. 1941 Jap.)  
Pacific Islands, N. New Guinea,  
D. E. Indies, Burma (Mar. 1942 Jap.)
- Allies

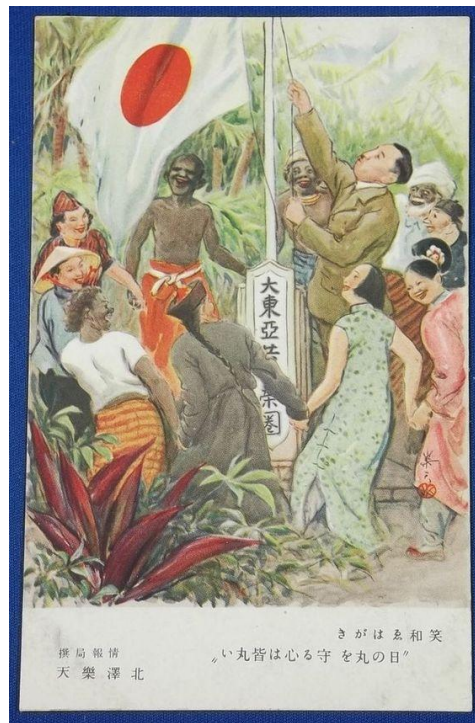
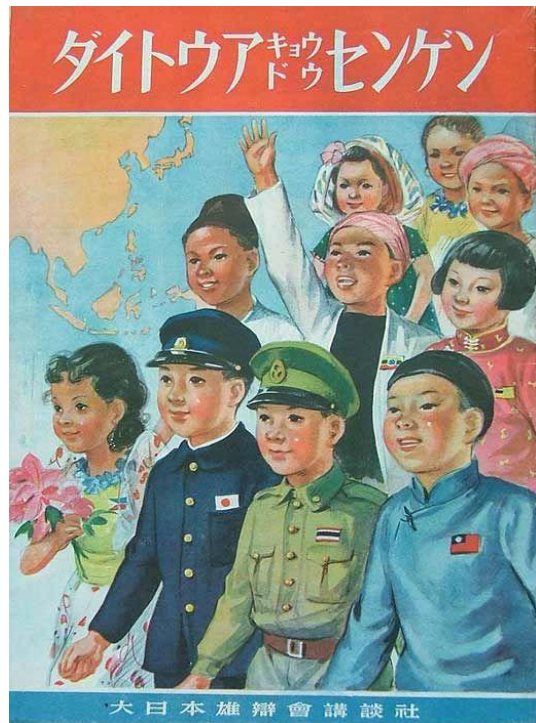


# ポスターと切手

日本、中国、満州の融和を訴える満州国の宣伝ポスター。キャプションは右から順に "日本、中国、満州国の協力で世界は平和になる"。描かれている旗は、右から中国の「五族協和」旗、日本の国旗、満州国の国旗。 10銭切手



# 大東亞共榮圈のプロパガンダ



# 内鮮一体

内鮮一体は、大日本帝国の 1936年(昭和11年)から1945年(昭和20年)にかけての朝鮮統治のスローガンで、朝鮮を差別待遇せずに内地(日本本土)と一体化しようというものである。

1920年(大正9年)に韓国最後の皇太子であった李王垠と梨本宮家の方子女王が成婚した際、「内鮮一体」「日鮮融和」というスローガンが初めて用いられた。1931年(昭和6年)に満洲事変が勃発すると、当時の朝鮮総督であった宇垣一成によって朝鮮の同化を目的とした内鮮融和運動が提唱された。

1936年(昭和11年)に宇垣の後任として第8代朝鮮総督に就任した南次郎は、内鮮融和をさらに進めたスローガンとしての「内鮮一体」を訓示し、運動を以前よりも強く打ち出した。国民精神総動員朝鮮連盟役員総会の席上で、南は「内鮮一体の究極の姿は、内鮮の無差別・平等に到達すべきである」としていた。

それにより、朝鮮の「大陸兵站基地」としての役割、朝鮮人による戦争協力、皇民化が強化され、朝鮮語が日本語に取って代わっていた [2]。具体的には1938年(昭和13年)に「第三次朝鮮教育令」も内鮮一体の精神に則って「一視同仁」の建前の元に改正され、朝鮮語を母語とし国語(日本語)を常用しない者の区別が解消された。これに伴って、陸軍特別志願兵制度が創設されて朝鮮人日本兵の採用も始まった [3]。

1939年(昭和14年)の『モダン日本』には「少数民族」の群雄が時代にそぐわないとし、「内鮮一体は、東亜の環境が命ずる自然の制約である」とする御手洗辰雄の「内鮮一体論」が掲載された。

戦争拡大の結果として、「帝国の大陸政策の前衛である兵站基地としての朝鮮」において「内鮮一体」がより必要とされ、また、「『八紘一宇』の大理想を実現するためには国民各自が自省自肅して私利私欲よりも公益を尊ぶ滅私奉公を持つしかない」とされ、必要と大義名分の両面から、「国民精神総動員を以てして民衆を優良なる皇国臣民たらしめ、産業経済・交通・文化を拡充して朝鮮人の民度を内地人と同等にまで引き上げて内鮮一体の実を挙げ、ひいては大東亜共栄圏の確立にも繋げることを目指した。







これだけ読めば戦える 一、南方作戦地方とはどんな所か

## 1. 英、米、仏、蘭等の白人が侵略した東洋の宝庫である

山田長政が暹羅(今の泰国)に渡って大いに活躍したのは、今から三百年前であったが、その後、徳川幕府が鎖国政策を取って、明治に至るまで日本人の海外発展を阻止した間に、英吉利、仏蘭西、米国、和蘭、ポルトガル等がわが物顔に東洋に乗り出して、文化の遅れた土人を脅迫・駆逐して、東洋諸国を植民地にしたのである。印度や馬來半島が英国に、安南が仏国に、ジャバ、スマトラ等が和蘭に、比律賓が米国に取られて、東洋で最も物資の豊富なこれらの国々がかばかりの白色人種に侵略せられ、数億の東洋民族が数百年の永い間、搾り取られ、虐め抜かれて今日に至ったのである。

われわれ日本人が有難い国に生まれ合わせて、天皇陛下の御稜威の御蔭で今日まで一度も外国の侵略を受けずに来たことに対し、東洋の他の民族は非常に日本を羨しがり、日本人を信頼し、尊敬し、日本人によって独立と幸福を受けられることを心から望んでいるのである。

## 2. 一億の東洋民族が三十万の白人に虐げられている

三億三千万の印度人がわずかに五十万の英国人に支配せられ、六千万の蘭印は二十万の和蘭人に、二千三百万の仏印は二万余りの仏人に、六百万の英領馬來は数万の英人に、一千三百万の比律賓は数万の米人に支配せられている。これらを総計すると、約四億五千万の東洋民族がわずかに八十万足らずの白人に支配せられて居る。今、印度を除き仏印、馬來、蘭印、比律賓だけについて見ると、約一億の東洋民族が三十万足らずの白人に虐げられているのである。一步敵地に上陸してみると、白人がいかにかに土民を圧迫しているかが明瞭であろう。堂々たる立派な建物が山の上や丘の上から小さな草葺きの土民の家を見下ろしている。東洋民族の膏血を搾った金はこれら少数の白人どもの贅沢な生活に費され、またその本国に持ち去られている。

これらの白人は母親から産れ出ると同時に数十人の東洋民族を奴隸に持つ勘定になる。これは果して神様の御心であろうか。

絶対多数の東洋民族が少数の白人共にこんなにもまで征服された原因は、同族相互の争いによつて力を消耗したことと、東洋人の東洋たる自覚を欠いたことが根本原因である。



### 3. 石油、ゴム、錫などの世界的産地である

石油がなくては飛行機も軍艦も自動車も動くことができない。英・米は世界石油の大半を占領し、消費に困っているながら、最も足りない日本に輸出するを禁じたばかりでなく、南洋から日本が買うことさえも妨害している。

ゴムや錫もまた軍事上なくてはならぬものであるが、これらの貴重な物資は東洋では南洋諸島が一番豊富である。わが国が常に正常な方法でこれらの物資を買おうとしても、これさえも邪魔してきた英・米の悪意が、今度の作戦を起こさなければならなくなった一つの原因でもある。蘭印や仏印は単独では日本に反抗できないことは明瞭であるが、英・米の支援と脅迫で日本に敵意を示しているのである。石油と鉄の足りないことは日本の弱点であるが、ゴム、錫、タンゲステンの足りないのは米国の最大弱点であって、これらは大部分南洋および南支から米国に供給されている。これを押さえたならば、日本は足りない石油や鉄を得ることができるのみでなく、米国の一番痛い所を突くことになる。米国が日本の南方進出を極端に厭い、かつ妨害してきた魂胆はここにも在るのである。

## 1. 東洋平和の大御心を体して

明治維新は廢藩置縣で日本を天皇陛下御親政の昔に還し、浦賀や長崎に来た黒船があわよくば日本を併呑しようとした危うい国難を切り抜けたのであったが、昭和維新は東洋平和の大御心を体し、亜細亜を白人の侵略から救い亜細亜人の亜細亜に還し、先ず亜細亜の平和を次いで世界の平和を確立せねばならぬ。

蒋介石を助けて日本と戦わせて来た黒幕は英・米である。彼らは日本の興隆を目の上の瘤として、あらゆる手段で日本の発展を妨害し、重慶支援や仏印・蘭印等をそそのかして日本に敵対させようとしている。彼らの希望するところは亜細亜民族の相克消耗であり、彼らの恐れるところは亜細亜民族が日本の力で独立を図ることである。世界人口の大半を占める亜細亜民族が団結して立つことは、数百年間亜まわまで細亜人の血を吸って肥ってきた英・米・仏・蘭人どもにとっては何よりの痛手である。

日本は東洋の先覚として満洲をソ連の野望より救い出し、支那を英米の搾取より解放し、次いで泰国[タイ]や安南[ベトナム]人、比律賓[フィリピン]人らの独立を助け、南洋土人や印度人の幸福をもたらしてやる大使命を与えられている。八紘一宇の精神はずなわちこれである。

今度の戦争の目的とするところは、世界の各民族をして各々その所を得しめることを理想とし給う陛下の大御心を先ず東洋において実現するため、東洋の各国が軍事的に同盟し、経済的には共存・互惠の原則で有無相通じ、相互に他の政治的独立を尊重しつつ東亜の大同団結を図り、その総合力によって東亜を白人の圧迫支配から解放するに在るのである。

今次事変の意義が上述のように極めて大きいのであるから、その中心としし指導者として立つ日本の受ける国難は肇国以来のものである。南洋の諸民族はみな我々日本人を心から尊敬しまた期待しているのであるから、我々はこの尊敬とこの期待を裏切らないようにすることが何より大切である。

これがため特に注意しなければならないことは次の通りである。

## 2. 土人を可愛がれ しかし過大な期待はかけられぬ

わずかに三十万足らずの白人に奴隷扱いされてきた一億の土人は、目玉の色も肌の色も我々によく似ている。世界の宝庫である土地を故郷として神様から貰って生まれたはずの土人が何の因果で白人どもに圧迫せられているのかと考えると、誰も可愛くなってくることだろう。

地理的に見ても歴史的に見ても土人にとっては英・米・仏・蘭人らは強盗であり、我らは兄弟である。すくなくも親類には違いない。ただ土人の中にも白人の手先になりスパイになって同胞を売り、亜細亜を裏切るものもすくなくない。特に高級官吏や軍人の中に多いことを考えて、我に害を及ぼすものは止むなく除かねばならぬが、降参してきたら気持ちよく許してやる雅量が必要ならぬ。

しかし裸で暮らして働かなくても食べられる自然の恩に恵まれた土人はなまけものも多く、また三百年の久しい間西洋人から抑えられ支那人から搾られてきて、全く去勢された状態にあるから、これをすぐにものにしようとしても余り大きな期待はかけられぬ事を心しなければならぬ。

#### 4. 仇なす仇は挫くとも罪なきものは慈しめ

英語ができないと上の学校へ入れない、一流のホテルや汽車、汽船では何でも英語を使っている日本の現況は、知らず知らずのうちに西洋人がえらいように考え、支那人や南洋人を軽蔑するようになってきたのである。

これは天に向かって唾を吐くと同様である。我々日本人が東洋民族として支那人・印度人と同様、長い間劣等民族の扱いを受けてきたことを記憶し、すくなくも東洋では彼らの傲慢・無礼な態度をたたき直してやらねばならない。

今度の戦争は、少しも仮借することなく我が正当な要求を貫徹することが必要である。ただ、掠奪したり婦人に戯れたり無抵抗なものを故意に殺傷したりすることは、道義日本の名誉にかけて絶無ならしめることを上下一体の強き戒めとし、陛下の軍人、陛下の軍隊たる矜持を傷つけないようにしなければならない。特に老人や子供や女に対しては寛大に取り扱ってやらねばならぬ。

## 5. 華僑とは何か

今から六百五十年ほど前、日本に攻めてきて博多の沖で神風に遭ってほとんど全滅になった蒙古の葱比烈は、その後、今の瓜哇[ジャワ]に遠征したことがある。三万の軍隊を一千艘の船に乗せて瓜哇の東北海岸に上陸し、南洋の珍宝を取るために遠征したのであるが、敵の詭計のため大きな獲物もなく引上げたことがある。この頃か**支那人**が南洋に渡って丁稚、小僧、苦力からたたきあげて段々金持ちになり、なまけものの**土人**をごまかし英・米・仏・蘭人らと結託して経済上の力を増し、今では南洋全部で五百万近くまで殖えている。**重慶**に軍資金を貢いでいるが、大部分は**重慶**側の宣伝に迷わされ、あるいはテロに脅かされて止むを得ず貢いでいる者が多い。これらに対しては反省の機会を与えて我が方に靡かせるように指導しなければならぬ。ただ注意しなければならないのは、彼らは西洋人の政治家と結んで上手な方法**土人**を搾っているから、**土人**の恨みは大部分華僑が引受けて西洋人は涼しい顔をしていることと、彼らの大部分は**民族意識**も国家観念もなくただ儲ける以外に道楽はない状態になっていることである。したがって東洋民族としての観念的な自覚を促したり、利益の伴わないことに彼らの協力を期待するのは難しいことと予期しなければならぬ。

## 7. 資源と施設とを愛惜確保せよ

日本が国家の存立に必要な石油は、英・米の悪意で世界のどこからも買えなくなった。南洋の石油を得ることは国家の生存上絶対的の必要であるが、敵は易々と我に渡すことはなからう。必ず各種の破壊手段を講ずることは予期しなければならぬ。飛行機で爆撃したりダイナマイトで爆破したりすることに対しては、敵の破壊に先立ちこれを占領し嚴重に警戒援護するは勿論、石油以外の物資でも出来るだけ多く押さえてこれを現地で利用し、または内地に送ることが必要である。石油抗でも工場でも鉄道でも通信施設でも、一度壊すと元のように直すのは容易でないことを十分考えねばならぬ。また分捕った自動車や兵器を取扱いの知らぬものがいじって壊すことが多い。従来戦争では敵のものは何でも破壊するか、または焼けばよいように考え、あるいは兵力が足りないのを口実にして焼棄した例が少なくない。敵の資源を壊さずに取り、これを最大限に利用することを徹底的に考えるとともに、一発の弾丸、一滴のガソリンといえども節用して、国力の消耗を少なくすることを終始念頭に置くことが、今度の戦争では特に大切である。

## 8. 敵は支那軍より強いのか

今度の敵を支那人に比べると、将校は西洋人で、下士官・兵は大部分土人であるから、軍隊の上下の精神的団結は全く零だ。唯、飛行機や戦車や自動車や大砲の数は支那軍より遥かに多いから注意しなければならぬが、旧式のものが多いのみならず、折角の武器を使ふものが弱兵だから役には立たぬ。従って夜襲は彼等の一番恐れる所である。

## 九、戦闘

### 1. 長い船旅も暑い行軍もこの一戦のため

上陸して敵にぶつかったら親の仇にめぐり合ったと思え。暑い苦しい船の旅や、暑い劇しい行軍も、ただこの敵を破るための道草であった。鬱憤を晴らすのはこの敵だ。徹底的に殲滅しなければ腹の虫が納まらぬ。特に緒戦が大切だ。

### 4. 逃げる敵の止めを刺すには

退却する敵を捕捉する際には、敵に先回りして水源地、井戸、泉を押さえることは着眼すべき一つである。

茶園 (1988, pp. 5-6)は、辻や大本営はハーグ条約やジュネーヴ条約の存在を知っていたはずだが、その内容を将兵には教育・啓蒙していないため、この小冊子の戦後名としては『これだけ読んでは"戦犯"になる』が相応だろう、としている。



# 福沢諭吉と脱亜論





# 脱亜論 現代語訳

世界の交通の道は便利になり、西洋文明の風は東に進み、至るところ、草も木もこの風になびかないことはない。西洋の人物は古代と現在に大した違いはないのだが、その活動が古代は遅鈍、今は活発なのは、ただ交通の機関を利用し、勢いに乗じるがためである。ゆえに最近、東洋に国がある民のために考えると、この文明が東に進んでくる勢いに抵抗して、これを防ぎきる覚悟であれば、それもよい。しかし、いやしくも世界中の現状を観察し、事実上それが不可能なことを知る者は、世の移りにあわせ、共に文明の海に浮き沈み、文明の波に乗り、文明の苦楽をともしる以外にはないのである。文明とは全く、麻疹はしかの流行のようなものだ。目下、東京の麻疹は西国の長崎地方より東に進み、春の暖気と共に次第に蔓延するものようである。この時、流行病の害をにくみ、これを防ごうとするにしても、果してその手段はあるだろうか？ 筆者はその手段は断じてないことを保証する。有害一辺倒の流行病も、その勢いにはなお抵抗できない。いわんや利益と害悪がともない、常に利益の多い文明はなおさらである。これを防がないばかりではなく、つとめてその普及を助け、国民を早くその気風に染ませることが知識人の課題である。

近代西洋文明がわが日本に入ったのは、嘉永の開国を発端とする。国民はようやくそれを採用するべきことを知り、しだいに活発の気風が生じたものの、進歩の道に横たわる老害の幕府というものがあり、これはいかんともできなかつた。幕府を保存しようとする、文明は決して入ってくることはできない。なぜかといえば近代文明は日本の旧体制と両立するものではなく、旧体制を改革すれば、同時に幕府も滅亡してしまうからである。だからといって、文明をふせいてその侵入を止めようとするれば、日本国の独立は維持できなかつた。なぜならば、世界文明の慌しい情勢は、東洋の孤島の眠りを許すものではなかつたからだ。ここにおいて、わが日本の人士は、国を重く、幕府を軽いとする大義に基づき、また、さいわいに神聖なる皇室の尊厳によって、断固として旧幕府を倒し、新政府を立てた。政府も民間も区別なく、国中がいっさい万事、西洋近代文明を採り、ただ日本の旧法を改革したばかりではない。アジア全域の中であって、一つの新機軸を確立し、主義とするのはただ、脱亜の二字にあるのみである。

# 脱亜論 現代語訳

わが日本の国土はアジアの東端に位置するのであるが、国民の精神は既にアジアの旧習を脱し、西洋の文明に移っている。しかしここに不幸なのは、隣国があり、その一を支那といい、一を朝鮮という。この二国の人民も古来、アジア流の政治・宗教・風俗に養われてきたことは、わが日本国民と異ならないのである。だが人種の由来が特別なのか、または同様の政治・宗教・風俗のなかにいながら、遺伝した教育に違うものがあるためか、日・支・韓の三国を並べれば、日本に比べれば支那・韓国はよほど似ているのである。この二国の者たちは、自分の身の上についても、また自分の国に関しても、改革や進歩の道を知らない。交通便利な世の中にあっては、文明の物ごとを見聞きしないわけではないが、耳や目の見聞は心を動かすことにならず、その古くさい慣習にしがみつかりありさまは、百千年の昔とおなじである。現在の、文明日に日に新たな活劇の場に**教育を論じれば儒教主義といい、学校で教えるべきは仁義礼智といい、一から十まで外見の虚飾ばかりにこだわり、実際においては真理や原則をわきまえることがない**そればかりか、道徳さえ地を掃いたように消えはてて残酷破廉恥を極め、なお傲然として自省の念など持たない者のようだ。**筆者からこの二国をみれば、今の文明東進の情勢の中にあっては、とても独立を維持する道はない**幸い国の中に志士が現れ、国の開明進歩の手始めに、われらの明治維新のような政府の大改革を企て、政治を改めるとともに人心を一新するような活動があれば、それはまた別である。もしそうならない場合は、今より数年たたぬうちに亡国となり、その国土は**世界の文明諸国に分割される**ことは、一点の疑いもない。なぜならば、**麻疹と同じ文明開化の流行に遭いながら、支那・韓国の両国は伝染の自然法則に背き、無理にこれを避けようとして室内に閉じこもり、空気の流通を遮断して、窒息して**いるからだ。

# 脱亜論

「輔車唇齒」とは隣国が相互に援助しあう喩えであるが、今の支那朝鮮はわが日本のために髪一本ほどの役にも立たない。のみならず西洋文明人の眼から見れば、三国が地理的に近接しているため、時には三国を同一視し、支那・韓国の評価で、わが日本を判断するということもありのた。例えば、支那、朝鮮の政府が昔どおり専制で、法律は信頼できなければ、西洋の人は、日本もまた無法律の国かと疑うだろう。

支那、朝鮮の人が迷信深く、科学の何かを知らなければ、西洋の学者は日本もまた陰陽五行の国かと思うに違いない。支那人が卑屈で恥を知らなければ、日本人の義侠もその影に隠れ、朝鮮国に残酷な刑罰があれば、日本人もまた無情と推量されるのだ。事例をかぞえれば、枚挙にいとまがな喩えるならば、軒を並べたある村や町内の者たちが、愚かで無法、しかも残忍で無情なときは、たまたまその町村内の、ある家の人が正当に振るまおうと注意しても、他人の悪行に隠れて埋没するようなものだ。その影響が現実にあられ、間接にわが外交上の障害となっていることは実に少なくなく、わが日本国の一大不幸というべきである。

そうであるから、現在の戦略を考えるに、わが国は隣国の開明を待ち、共にアジアを発展させる猶予はないのである。むしろ、その仲間から脱出西洋の文明国と進退をともにし、その支那、朝鮮に接する方法も、隣国だからと特別の配慮をすることなく、まさに西洋人がこれに接するように処置すべきである。悪友と親しく交わる者も、また悪名を免れない。筆者は心の中で、東アジアの悪友を謝絶するものである。

# 差別主義者なのか

## 2.1.1 一八八五年・『時事新報』紙上に掲載される

### 2.1.1.1. 論説「脱亜論」と脱亜思想

本論文が扱うのは福沢諭吉の「脱亜論」の成立事情とその影響に関する諸々についてである。論を進めるにあたり最初にお断りしておきたいことは、この場合の「脱亜論」とは一般にいわゆる彼の脱亜思想のことではなく、あくまで一個の論説としての「脱亜論」である、ということである。それというのも論説「脱亜論」と、福沢の思想の中核をなす脱亜思想とでもいうべきものはしばしば混同されがちで、そのために重要な点が見失われているように思われるからだ。

**福沢が脱亜の主義として終生儒教を排した**ということについての研究者の理解には大きな隔たりはない。しかし**排儒教の表明としての脱亜思想と、論説「脱亜論」が一般に受け取られている印象にはややずれがある**。例えば広い意味での脱亜思想の著作である『学問のすゝめ』(一八七二～七六)や『文明論之概略』(一八七五)がしばしば肯定的に扱われているのに、論説「脱亜論」には、近代化しつつある日本のおごりやアジアの人々に対する民族蔑視として、否定的な評価しか与えられることはない。要するに「脱亜論」は非常に「有名な」論説ではあるが、その名高さは、完璧に「悪名」としてなのである。

◎福沢諭吉自身、儒教に対する否定的評価から、中国、朝鮮が儒教的価値観を捨てきれずにいることへの悪罵

〈記憶をつくるもの〉独り歩きする「脱亜論」1 <https://www.asahi.com/international/history/chapter02/memory/01.html>

## ■中国・朝鮮への「絶交宣言」

「脱亜論」は、明治18(1885)年3月16日付の日刊紙「時事新報」の1面に掲載された社説の題である。特別にこの日何かがあったわけではなく、当時の日刊紙の多くは、社説を1面に載せるスタイルをとっていた。

無署名だったが、筆者は福沢諭吉。今ならば主筆兼論説主幹というところか。分量は2000字余り。別巻も加えて22巻ある「福沢諭吉全集」では、3ページが割かれているだけの短い文章だ。

## 〈記憶をつくるもの〉独り歩きする「脱亜論」2

### ■当時は評判にならず

ではこの社説、どのようにして生まれたのか。

前年の12月、朝鮮の近代化を目指す金玉均(キム・オッキョン、きん・ぎょくきん)ら親日派がソウルでクーデターを決行。日本軍の支援を受けて一時は王宮を占拠し、反対派を粛清した。ところが3日目には清軍に鎮圧され、クーデターは失敗した。日本の公使館も焼失。日本人の死者も出た。

この大事件を日本の新聞が競って報じる中、時事新報の紙面は特に熱を帯びた。福沢は金玉均らと親交を結び、活動支援のために慶応義塾の門下生を朝鮮に送り出していた。「脱亜論」は、親日派のクーデター失敗に対する失望を背景に書かれたのだ。

しかし、掲載当時は、さほど評判にはならなかったようだ。

時事新報の歴史に詳しい武蔵野学院大の都倉武之講師によると、同紙は当時、創刊3年で7000部余りまで部数が急増。インテリ層が対象の新聞としてはトップクラスに成長していた。朝鮮に関する報道でさらに信頼を高めたが、「脱亜論」が単独で注目された形跡はない。福沢も以後は「脱亜論」に一度も触れず、脱亜という言葉も使わなかったという。都倉さんは「時事新報社内でも引用されたことはなく、その存在は忘れられていた」とみる。

## 〈記憶をつくるもの〉独り歩きする「脱亜論」3

### ■侵略の論理で戦後に復活

忘れられた「脱亜論」が、再発見されたのは第2次大戦後だった。

その過程を詳しく追った静岡県立大の平山洋・助教によると、最初に引用されたのは1951年。歴史学者の遠山茂樹が書いた「日清戦争と福沢諭吉」という論文だったという。

福沢諭吉の外交論が見直される中で、中国・朝鮮への強硬姿勢を示す「脱亜論」が研究の対象になり、それにつれ知名度が上がった。1983年には山川出版社の高校日本史教科書にも取り上げられた。

中国や韓国でも、「脱亜論」はじわりと広がる。ソウル大国際問題研究所の姜相圭(カン・サンギュ) 研究員によると、韓国で研究論文への「脱亜論」の引用例が見られるようになったのは1970年以降だという。80年代に日本の歴史教科書問題が起きると「脱亜論」は日本の侵略の論理として改めてクローズアップされた。現在は高校世界史教科書にも引用されている。中国でも2003年、江蘇省などで大学入試の問題に用いられている。

日本語のネット空間でも「脱亜論」という言葉は飛び交っている。靖国参拝などがきっかけで起きた近隣外交でのあつれきをめぐって、あるいは東アジア共同体づくりをめぐる論争の中で、中国や韓国への強硬姿勢を求める意見の中で挙げられているケースが目につく。

都倉さんは「脱亜という言葉が福沢から離れて独り歩きしている。アジアとの関係で、自分の考えを権威づけたり、補強したりするときに都合良く使われてしまっている」と話す。

## 石川啄木『時代閉塞の現状』

「大学を出ても半分が職がなく、それ以外の多数の青年が努力しても 30 円以上の月給を取れないので、父兄の財産を食いつぶす“遊民”が増えている。強権の勢力があまねく生き渡り現代社会組織が隅々まで発達し、青年を取り巻く空気はすこしも流動しない。なのに、そうした制度の欠陥は日一日明白になっている。戦争・豊作・飢饉という“偶然”がなければ改善の見込みのない社会経済状態、財産とともに道徳心も失った貧民と売春婦の

増加は何を語っているのか。今や我々には、自己主張の強烈な欲求が残っているのみ。理想を失い、方向を失い、出口を失った状態で、今日我々青年が持っている内向的、自滅的傾向は、実に“時代閉塞”の結果である。」(「時代閉塞の現状」から筆者抜粋 現代語訳)



# 東洋の理想

今日は大多数の西洋思想が我々を混乱せしめている。世人の言うごとく、大和の鏡は曇っている。明治維新とともに、日本はまったく過去に立ち戻り、そこに日本が必要とする新しい活力を求めている。およそ真の維新の特徴として、明治維新も、多少の相異はあるが、一種の反動である。けだし、足利時代にはじめられたかの自然に対する美術の献身は、いまや民族へ、人間そのものへの奉獻となった。我々は我が国の歴史のなかに、我が未来解決の鍵が存していると直覚的に確信し、その鍵を発見せんとして、見境もなくはげしき模索をしているのである。しかし、もしその考えが正しきものであり、また、もし実際我々の過去に、くしくも更生の源泉が潜むとすれば、いまこの秋こそ、この泉はある大補強を必要とすることを認めねばならない、というわけは、現代の俗悪の焼くがごとき早魃は人生と芸術の咽喉を涸渇せしめつつあるからである。

我らは、闇を切り開く電光閃く剣をもつ。なんとなれば、恐るべき静寂を破らなければならない、そして新しき草花が咲き出でて、その花をもって地上を覆いえる前に、新しき生氣を含む雨滴がこれを清新にしなければならないのである。しかし、アジアを覚醒する大声叱咤の声は、アジア自身の口から、民族古来の伝統の街道に沿って聞こえて来るに違いない。

「内部よりの大勝利あるのみ、しからずんば外部の大敵に倒れるべし」

大川周明

「社会制度の根本的改造を必要とし、実にマルクスを仰いでわが師とした」。

「カール・マルクスによりて唱導せられたる一大真理、ダーウィンが自然界に向ひてなせる発見を、人類社会に向つてなせりと称せらるる所のものなり。…悪しき実を結ぶ巨木を倒すことをせずや。革命の斧を揮ふてわれらとともに一打をその根に加ふることをせずや」。

## 5・15事件の檄文

「軍部内一味の革新論の狙ひは必ずしも共産革命に非ずとするも、これを取り巻く一部官僚もしくは民間有志(これを右翼といふも可、左翼といふも可なり。いわゆる右翼は国体の衣を着けたる共産主義なり)は、意識的に共産革命にまで引きずらんとする意図を包蔵しおり …」

# レーニンを支持する大川周明

僕は(一九一七年の)当初からレーニン政府承認論者であり、日露通商主張者である」

「来るべき(明治維新に次ぐ共産革命の)第二維新においては、倒さるべきものは黄金を中心勢力とする閥(ブルジョア階級)であり、興さるべき者は貧苦に悩む多数の国民(プロレタリア階級)である。すなわち第一維新の標語が<尊王倒幕>なりしに対し、第二維新の標語は正しく<興民討閥(プロレタリア支配の共産社会づくりのため、日本からブルジョア階級を打倒せよ！)>でなければならぬ」

「ボルシェヴィキ(ソ連)とアジアとが、全然相一致することは言うまでもない。共通の敵たる西欧列強と戦うことにおいて、両者(アジアとソ連)が握手することに何の不可思議もない」

# 大川周明

大学卒業後、インドの独立運動を支援。ラース・ビハーリー・ボースやヘーラムバ・グプタを一時期自宅に匿うなど、インド独立運動に関わり、『印度に於ける國民的運動の現状及び其の由来』(1916年)を執筆。日本が日英同盟を重視して、イギリス側に立つことを批判し、インドの現状を日本人に伝えるべく尽力した。

1918年(大正7年)には南満洲鉄道に入社する。これは、初代満鉄総裁の後藤新平に、植民地インドに関する研究論文が評価されたことによる。のち、満鉄東亜経済調査局の編輯(へんしゅう)課長を務める。

イスラム教に関心を示すなど、アジア主義の立場に立ち、研究や人的交流、人材育成につとめ、アジアの各地域に於ける独立運動や欧米列強の動向に関して『復興亜細亜の諸問題』(1922年)で欧米からのアジアの解放とともに「日本改造」を訴えたり、アブドゥルアズィーズ・イブン＝サ우드、ケマル・アタチュルク、レザー・パフラヴィーらの評伝集である『亜細亜建設者』(1941年)を執筆した。ルドルフ・シュタイナーの社会三層化論を日本に紹介している(「三重国家論」として翻訳)。

## 政治・軍事への関与

大正・昭和期に、北一輝、満川亀太郎らと親交があり、特に北一輝とは上海で2日間語り合い、北が計画している「日本改造」の原稿を託される。その際、北が「君も命を狙われているだろうから」と仕込み槍を贈られたという逸話がある。

日本で普通選挙運動が盛んだった頃、「日本改造」を实践する結社猶存社や、行地社、神武会を結成。貴族院議員の徳川義親侯爵と親交が深く、徳川から金銭的援助を受けており、徳川は、大川やその他日本改造主義者たちの経済的パトロンであった。

# 大川周明

三月事件・十月事件・血盟団事件などほとんどの昭和維新(クーデター)に関与し、五・一五事件でも禁錮の有罪判決を受けて、1936年(昭和11年)6月11日に豊多摩刑務所に収容。

満洲事変に際しては首謀者の一人板垣征四郎と親しく、笠木良明が結成した大雄峯会が柳条湖事件や自治指導部などで関わった満洲国の建国を支持し、在満邦人と満洲人民を政治的横暴から救うという視点から「新国家が成立し、その国家と日本との間に、国防同盟ならびに経済同盟が結ばれることによって、国家は満洲を救うとともに日本を救い、かつ支那をも救うことによって、東洋平和の実現に甚大なる貢献をなすであろう」と主張した(文藝春秋昭和7年3月号『満洲新国家の建設』)。北守南進を主張していたが、それはあくまでも「日中連携」を不可欠のものとしており、日中間の戦争を望むものではなかった。

## 日中戦争・第二次世界大戦中

日中戦争が勃発時大川は獄中にあった。1937年(昭和12年)10月13日に仮出所。五・一五事件に関係した民間人には本間憲一郎、頭山秀三(頭山満の三男)らがいたが既に釈放されており、大川が民間人最後の出所者となった。出所後は、しばらくの間、東京都品川区上大崎の自宅にて静養を続けた。

第二次世界大戦については、「最後の瞬間までこの戦争を望まず1940年に、日本がもっと準備を整える時まで、戦争を引き延ばそうと努力した」と記述があるとおり、肥田春充とともに日英米戦回避のため開戦前夜まで奔走した。また、大東亜戦争中は大東亜省の大東亜共同宣言の作成にも携わった。

## 戦後

訴追の理由として「扇動的な書物を出版し、講演で変革を訴え、超国家主義的右翼団体を結成」「陸軍が合法的独立国家の中国から満洲を奪取できるように、満洲事変の陰謀をめぐる計画」が挙げられている。

# 石原莞爾の中国観

石原は、辛亥革命勃発の際にはその前途に希望を持ち、大きな喜びに震えた。

ところがその後軍閥間の抗争に明け暮れる中国に失望し、中国人の政治能力に疑問を抱く。満洲事変直前には、来たるべき日米間の世界最終戦争の準備が必要で、日本が満蒙を領有し、その治安を守る、といった考えを構築する。

満洲事変・満洲国建国の過程で、石原の中国人の政治能力に対する懐疑は解け、満蒙独立論に転化、日中平等の民族協和国家の建国を推進する。この民族協和政治の実現は協和会に期待し、満洲を去り参謀本部で自らの構想を提唱するが必ずしも理解されない。

「日支平等」の考えを成長させ、東亜聯盟を提唱していく一方で、参謀本部作戦課長や戦争指導課長としてソ連の脅威にどう対処するかを考えざるを得ず、満洲国構想も東亜聯盟論もこの点で意味づけられた。すなわち満洲国東亜聯盟を完成させ、国防を充実させソ連に対抗し、また日本国内の改造(昭和維新)が必要

# 南満州鉄道と朝鮮半島の連結

朝鮮半島縦断鉄道が満鉄と連結することになった。

鴨緑江鉄橋の完成は、一時流行り小唄まで生まれたほど社会のさまざまな分野に多大な影響をもたらしたが、中でもこの橋を通過して日本から朝鮮、「満州」を経てヨーロッパに至る国際連絡運輸が実現されたことで、日本の近代ツーリズムの成立。

鉄道院を中心とする日本郵船、東洋汽船、南満州鉄道などの共同出資でジャパン・ツーリスト・ビューロー(JTB)が設立され

満鉄経由世界一周周遊券、東半球周遊券「新橋から倫敦ゆき」の切符が発売されたのである。

満鉄の広告には「旅行シーズン来る/朝鮮へ!/満州へ!/支那へ!」というすこぶる直截的な宣伝文句が大きく刷り込まれている。

## 満州への修学旅行

日本の中高生の「満韓」への修学旅行は・・・文部省と陸軍省の共同主催で全国から選ばれた一部の中学生が五つの班に分かれ、日露戦争の戦跡をめぐる「中学校合同満州旅行」が実施され、以後これに右へ倣えの形でいわゆる「戦場旅行」が急速に全国に広まっている

「満韓」への修学旅行は地理的に近いということもあって、最初は主に九州や山口県の学校を中心に行われたようである。たとえば福岡県立修猷館中学校が明治三十九年に「満韓旅行を実施しているし、その翌年には山口高等商業学校が後に続いた(久保尚之『満州の誕生』)



## 夏目漱石と満州

「満韓」旅行を切っ掛けに漱石は文学における人物像は明らかにある変化を見せ始め、これまでの作品にはけっして現れることのなかった、言ってみれば外地志向型の人物が一つのタイプとして新たに創出され始めるからである。

彼らは、あるいは恋愛競争の失敗者、あるいは近代システムからの逸脱者として造形され、その存在は、同じ「遊民」の性質を持ちながらも、従来のいわゆる「高等遊民」、たとえば『三四郎』の広田先生や『それから』の長井代助などと異なり、むしろ根本的なところでそうした「高等遊民」を含む主人公たちの世界を相対化するものとして機能していた。

## 新天地を目指した日本人

昭和恐慌で疲弊した日本の各地方から、農家の次男や三男らのほか、生活の糧を求める人々が開拓団員として「新天地」の満州へ渡った。

新興財閥系を中心に企業の進出も相次ぎ、満州に住む日本人は推計 155万人に達した。日本の敗戦で命がけの逃避行を強いられる運命を、彼らはまだ知らなかった。

五族協和の多民族カルチャー

**スローガンが言う「五族」は多くの場合、日本人、漢人、朝鮮人、満州人、モンゴル人を指す。ただ、漢人と満州人はひとまとめにされることも多く、社会主義のソ連を逃れた白系ロシア人もしばしば含まれた。**

**多国籍的な街並みや伝統的な民族行事、最新のモダンカルチャーなど、表向きは多様な文化が花咲いた。**

## アヘンだらけだった満州

国家を名乗りながら、満州国には憲法も国籍法もなく、住民票の整備も進まなかった。住民を正確に把握できないため、税金を得る手段は限られる。

満州事変を起こした関東軍が、占領地の財政収入の柱の一つとして想定したのが、アヘンからの収益だった。

中国では清朝の時代からアヘンが蔓延(まんえん)していた。満州国政府は表向きアヘンを禁止しながら、「中毒者」は当局に登録させ、「治療」の名目で政府が販売するアヘンの吸引を許可した。ただ、実態は、届け出をすれば誰でもアヘンを吸えた。

## 密売業者が掲げた「日の丸」

満州国の「建国」以前から、中国の租界(外国人居留地)などで暮らす日本人には治外法権が認められ、アヘンやモルヒネの密売に手を染めた者が多数にのぼった。

「徹底的に取り締まれば、人がいなくなってしまう」。1922年に中国・天津の総領事だった吉田茂は嘆いている。

密売業者は治外法権を示す「日の丸」を掲げ、禁止されている薬物を売っていた。満州での治外法権は37年12月に撤廃されたが、その後も日本人への取り締まりはゆるかったという。

戦時下に関東軍の参謀副長などを務めた池田純久は、「時々日本の国旗凌辱事件が起こり外交問題に発展することがあったが、よく調べると中国人はそれを国旗とは知らず、阿片の商標だと思っていた」と、戦後の著書に記した。

# 右翼も左翼もとりま満州へ行け

## 日本における満州人脈

満洲国の実質的支配層であった日本人上級官僚や当時の大陸右翼、満鉄調査部の関係者などが母体である。二・二六事件に関与して左遷された軍人や、共産主義者からの転向者も多い。ソビエト連邦の経済政策を参考として、満洲国の経済建設の実績をあげた。満鉄調査部事件などで共産主義活動の嫌疑をかけられ検挙された者もいる。ここで培われた経済統制の手法は戦時体制の確立や、戦後の日本の経済政策にも生かされていく。岸総理や右翼の児玉誉士夫などの大物が名を連ね、戦後保守政治に影響力を及ぼした。

